
I S 《インフィニット・ストラトス》－オーストラリアの代表候補！？

グニル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

ISーオーストラリアの代表候補!?

【Nコード】

N9849X

【作者名】

グニル

【あらすじ】

ISが開発されて10年・・・ISとまったく関係ない生活を送っていたオーストラリアの普通的女子学生。なのに女子全員が受けるIS適性検査でいきなりA判定!?!そして代表候補生として日本に!?!?!

本来は存在しないオーストラリア代表候補生、カルラ・カストの視点でISの世界を描いてみようという無謀な試み!

原作を読むか、またはアニメを見てからご覧することを強くお勧めいたします!

それではどうぞ！

0-0 (前書き)

ご覧頂きありがとうございます。とりあえず本編へどうぞ！

序章

IS、正式名称「インフィニット・ストラトス」。

宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要として運用され始める。

ISの核となるコアは完全なブラックボックスとなっており製作者の篠ノ之博士しかコアの製造を行うことが出来ない。

しかし篠ノ之博士はISのコアを467個を作った時点でそれ以上の製造を止め、行方を眩ませる。

故に現在ISの絶対数は467機であり、専用のISを持つ事が許されるのは政府や企業の関係者の中でも、選ばれた者のみである。そのため、新しいISを開発する際には既存のISを一度解体し、コアを初期化せねばならない。

しかもISは何故か女性しか起動させることが出来ず、理由は製作者の篠ノ之博士すら分かっていないらしい。そのため世の中には必然的に女尊男卑が浸透していくことになる。

――『ISが出来てからの歴史』、第一章冒頭より――

「ふう・・・」

もう何度も読み返し、ボロボロになった本を閉じて私は目を閉じる。

今は日本へ向かう政府専用旅客機の中だ。

先ほどまでの眼下に広がっていた青い海は無くなり、既に旅客機は空港への着陸態勢に入っている。

本来は本にあるとおりISを扱えるのは、ISを扱っている大企業や保有している企業であり一般人は触れることさえ許されない。

それなのに1年前までただの女子学生だった私がIS学園に入学だなんて・・・運命なんていうのは分からない。

『本気はまもなく着陸致します。お立ちのお客様は席に戻ってシートベルトをお締めください』

うん、既に腰には少しきついくらいにシートベルトが締めである。というより飛行機が離陸してから一回も外していない。

どうしても飛行機は好きになれないのだ。あの巨大な鉄の塊が飛ぶと考えるのは未だに信じられない。

まだISの方が空を飛ぶのは分かると言いたい位だ。

着陸の衝撃に備えて少し体を強張らせる。

『本機は着陸しましたが、完全に停止するまでお席はお立ちにならないようにお願いします』

「あ、あれ？」

いつの間に着陸したんだろう？全然揺れを感じなかった。

「ははは、この機のパイロットは我が国でも最も腕のいい者を選出したからね。初めての人は驚くのも無理はない」

「はあ・・・あ！」

隣からかけられた声に思わず生返事をしてしまった。

「す、すいません！」

「いやいや、そんな畏まらなくても大丈夫だよ」

正面にるのは付き添いで来てくれている黒いスーツ姿の男の人。
政府のIS関連の第一人者さんだ。

名前は・・・あれ？覚えてない・・・あ、あとで名刺見て覚えておかなきゃ！

そうこうしている内に飛行機が完全に停止する。
シートベルトを外して席を立とうとすると、足が動かなかった。

「あれ？」

どうしたんだろう？

「あー、離陸してからずっと足を動かさなかったでしょう。そのせいで筋肉が硬直しているんですよ。荷物などはこちらで運んでおきますので動けるようになったら出口までおいでください」

「あ、わざわざすみません」

「いえいえ、今時分はあなたの様な女性のほうが珍しいですよ。では」

そう言いながら要人さんは出て行った。手で足を伸ばしつつ少し椅子を倒す。

「ん・・・」

あの人の言ってた通りみたい。感覚のなかった足が痺れてきている。

いくら緊張してたとはいえ恥ずかしいところ見せちゃったなあ。こういう時は政府専用機っていうのも他の人に見られなくていいかも・・・

先ほどあの人が言った言葉を思い出す。

ISは本にも書いてあったとおり、何故か『女性にしか反応しない』。

そして現行、世界最強の兵器はそのIS。つまり世界のパワーバランスはISの保有数とそれをより高い技術で操れる担い手、すなわち女性の数で決まる。

となれば必然的に女尊男卑が当たり前になってしまう。かつては女性に人権を認めず、あらゆる弾圧に屈しなかった宗教国家でさえ、宗教の根本から覆されるほど。

かつての男性優位の国家はISを保有していない国ぐらいだろう。

そしてそうなれば必然的に横行な女性も増える。自分の周りにはあまりいなかったが、それでも街のマーケットでは奴隷のように男性を使う女性を見かけたこともある。

必要とされているのはISを使える人であって一般の女性ではない。

関わっているから言えることだが、本来ISなど無い方がいいと思う。

ISはどこまで追求しても『兵器』だからだ。『兵器』とは敵となった目標を殺傷、破壊するために使う道具。つまりは人殺しの道具だ。

今はスポーツみたいに使われているが、使い方を間違えればそれは簡単に人を殺傷する道具になる。

最も懸念されているのは第三次世界大戦・・・いや、『第一次IS大戦』だ。これはISが登場した10年前から頻繁に話題になる。

ならば本来こんなものは全世界的に排除して元に戻したほうがいい、というのが自分の考えだ。

でも作られたもの、更に言えば便利であるものを人は捨てることは出来ない。

さらに言えば、ISがあることで世界の技術力は飛躍的に上昇している。世界経済もISの開発、ということで雇用を生み出し非常に安定している。

デメリットを消せないならせめて今あるメリットを享受するしかない。

なら自分は自分に出来ることを・・・

そう思って結局私はISを使っている。

「偽善・・・だね・・・」

自然と独り言がでてしまった。

足の痺れも取れてきた。

うん、これなら歩けるかな。

立ち上がると足はしっかり床を捉えてくれた。

CAさんに案内されて出口へ向かう。

外に出ると既に迎えのリムジン車の前にさっきの人が待っていてくれた。

階段を下りていくと気づいたみたいでこちらに手を振ってくる。

「すみません、お待たせしました！」

「いえいえ。さ、お手をどうぞ」

右手を取られて車へ案内される。車の中は広い。今は慣れているけど一年前は本当に落ち着かなかった。

それでも・・・うー、やっぱり慣れないなあ。小さい普通の乗用車のほうが温かみがあって好きなんだけど・・・

車が静かに音を立てて発進する。離陸前の説明では今から大使館へ向かい入国兼入学手続きを行うらしい。

そんなに時間はかからないらしいから日本を見学できるといいんだけどなあ・・・

「カスト様、右手にIS学園が見えますよ」

運転手に促されて右を見ると海上の一つの島丸々使った巨大な施設が見えた。

あれが・・・IS学園・・・

操縦者に限らず専門のメカニックなど、ISに関連する人材はほぼこの学園で育成される日本の教育機関。

「大きい・・・」

漠然とした感想だけどそれが一番だ。対岸のここからでも把握で
きないほどの大きさがある。

「楽しみ・・・というより不安かも・・・」

あわわ・・・手が震えてきた！どうしよう！

0-0 (後書き)

初めまして。作者のグニルと申します。

ユーザから入ってもらえれば分かるとおり、作者は『ネギま!』の二次創作もやっています。

この作品はその過程で息抜きで書いていたものなのですが、何故か原作第一巻分が出来てしまったので折角だから破棄するのももったいない。という作者の考えから投稿した作品です。

主人公のプロフィールは次回のあとがきに書きます。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしてます。

してもらえたら作者のテンションが『ヒヤッホイ!』しますw

こんな作者ですがよろしくお願いします orz

設定

名前、カルラ・カスト

性別、女

身長、155・6cm

容姿、長く淡い赤髪を右側でサイドテールにしている。瞳の色はオレンジ

体型は年相応の発展途上。

趣味、節約、読書、銃器集め

詳細、

IS学園一年一組所属、オーストラリアの代表候補生。

本人は争いごとが嫌いなため一度代表候補になるのを拒否したが、考えを改め守るための兵器としてISを使うという条件で協力することを決意しジャクソン社に所属。IS学園に入るまで本国で試験パイロットとして基礎操作を学んでいた。

争いごとは嫌いなのだが銃器集めという変わった趣味を持っている。

集中力が高く、一つの物事に熱中するタイプ。そのせいで周りを見ていないこともシバシバ。集中してるところに話かけられると「ひゃい!」と言ってしまふ癖がある。(本人は「はい」と言ってるつもり)

普段は物静かなのだが、自分が大切に思っているものを傷つけられたり馬鹿にされるのが許せない性格で、そういう時は普段以上に感情をむき出しにする。

学校の寮で一人暮らしをしていたので料理の腕などは上手い。強気な人に非常に弱いため、織斑千冬はほぼ畏怖の象徴と化している。両親はどちらもジャクソン社社員

オーストラリア

詳細、

保有ISは25機とかなり多い。内訳は22機が第2世代IS『デザート・フォックス』、3機が第3世代試作型IS『デザート・ホーク』

理由として周囲が海に囲まれ進入が容易なことから防衛として多く配備されている。

これを認める代わりに国際IS委員会の取り決めにより、オーストラリアは南シナ海までの周辺諸国の海上警備、周辺諸国への一定状況下のISの貸し出しが義務付けられている。この取り決めにより含まれる国々は赤道に近いことから赤道連合と呼ばれている。

また、そのことによりオーストラリアだけが有利にならないように、オーストラリアのIS関連の企業には防衛している国々から一定人数以上技術者を雇い入れること、また国家IS代表者、代表候補生も他の国から選出することを義務付けている。（技術が見合わなければこの限りではない）

赤道連合への参加国

オーストラリア、インドネシア、マレーシア、フィリピン、パプアニューギニア、ニュージールランド

ジャクソン社

詳細、

オーストラリアに存在するIS専門の国営企業。

基本的に赤道連合のISは全てこの企業に属していることになっている。

第2世代をほぼ自国の中で研究しつくし、現在は第3世代ISの実験開発の段階に入っている。

技術者、開発者、パイロットなど様々な人材を出身国、階級などで差別せず（半分以上条約によるものだが）、能力だけで判断する特異な体系を取っている。これにより他の国、企業よりも一般人に近い身分の人たちの割合が多い。その分様々なアイデアを取り入れてきたため他の国に見ない武装が多い。機体名と武装名の統一感がないのも様々な国家の人が関わっているからである。

一つのベースを作りそれを強化していくのが特徴。現在開発している第3世代IS『デザート・ホーク』も3形態まで強化装甲が考^{パッケージ}えられており、状況によっては型番後に『改』などをつけ、特殊兵装の実験配備を行っている。

IS

専用IS「デザート・ホーク・『改』」

詳細

オーストラリアのジャクソン社製第3世代型ISの試作改良版。

オーストラリア第2世代型IS『デザート・フォックス』を基盤に機動性を重視。安定性と稼動効率に特化させられており、防衛任務に適している。また、試作機であるのに即実戦投入が可能に設計されている。

本領を発揮するのはパッケージを付けた際の極地戦闘。

パッケージ無しだと扱いとしては『デザート・フォックス』の強化版、つまりはどんな状況でも対応できるマルチロール機であるが見なされ、実験的にエネルギー兵器、ビーム兵器を搭載して入るが、他国からはあまり重要視されていない。

武装を量子化できるISとしては珍しく複数の武装を常備装備として採用してある。これは相手に高速切り替え戦闘を持ち込まれた際の対応策であり、基本は量子化された兵器を呼び出して戦う。

また、それらの常備装備は隠し武器的要素が強く作られており、一見すると装甲や装飾と見間違えられるように偽装され、あらゆる体勢から攻撃が出来るように装着されている。

オーストラリアISの兵装

・18mm突撃銃『ラングリスニ』

命中率よりも連射力を重視し、面での制圧を主とする。セミオートとフルオートの使い分けが可能。

・24mm対空散弾銃『ラングニスト』

射程距離は短い分、射程内には多数の弾丸をばら撒く。ミサイルや弾丸の迎撃、近距離の敵への牽制などに使われる。

・70mmグレネードランチャー付22mmアサルトライフル『ゲリュ』

銃身下部に一発限りの高威力グレネードと22mm弾を採用。18mm突撃銃よりも一発の破壊力を重視しているため連射力や面性圧力は劣るが命中率と破壊力で勝る。

・10' 5mm機関銃『フローキ』

オーストラリアの砂漠環境に適したミニガン。銃自体の重量が重く銃身が大きいため取り回しが悪いが、最も高い連射性を誇る。

・6連発回転式グレネードランチャー『フェンリス』

連続発射可能のグレネードランチャー。リボルバーを採用しているため連射力が高いが一回の戦いで6発が撃てる限度。

・46mm対装甲ライフル『ゴルフアックス』

6連発回転式グレネードランチャーに次ぐ破壊力を持つライフル。反動が大きく連射は出来ないが高い威力と命中率を誇る。射程が最も長い。

・ヒートランス『ブリュナーク』

ジャクソン社が当初から採用しているIS近接戦闘の主武装。2m程の両手持ちの槍で本体は実体槍として機能する。

槍の先端から強烈な熱量を噴射することにより融解による貫通能力を持つ。

『デザート・ホーク』が開発されてからは柄の部分が強化され、高速回転させることで弾丸、ビーム兵器を弾くことができる。

『デザート・ホーク』専用兵装

・両手首上部、10mm2連装ショットガン 『ドラウニプル』

両手を自由にするため手甲上部に仕込まれた小型のショットガン。口径が小さく、装填数は少数、射程距離は短いと使いどころが非常に難しい。

だが罅迫り合い時からの近距離射撃は非常に脅威。また、他の武

装とも共有が可能。

・両手首下部、仕込み鞭 『グレイプニエル』

本機最大の特殊武器で、手甲の下部に仕込まれている。使用者の意思で手甲から射出できる超弾性鋼の鞭。

柔軟性に富み、叩きつける以外に、相手の一部や武器を絡め取ったりそのまま自分に引き付けたりする事も出来る。

常人が気絶する程の高電圧を流し込むことが可能で、相手のシールドエネルギーを削り、IS操縦者にも直接ダメージを与えることが可能となっている。また、相手の武装にこの高電圧を流し込むことで武装自体を破壊することが出来る。

両手の武装との共存が可能で、この武装で相手の攻撃を止めつつ攻撃するということも可能。

・両膝両足、仕込み短剣 『スレイヴニル』

両膝の前部、両足先端についている鋭い突起のような武装。端から見るとただの飾りだが、取り外しが可能。

それぞれ装甲内部には小型の実体短剣を備えており、膝は主に投擲し牽制に使用、足は蹴りの時に展開することが出来る。

・両肩部エネルギーブーメラン 『ヴェルフエルム』

実験的に装備されたエネルギー武装。普段は『スレイヴニル』と同じくただの飾りに見える。

一度投げれば機体と連動して確実に自分の元に戻ってくるため、相手の位置を誘導できれば相手の不意をついた攻撃を行うことが可能。

手に持ってナイフのように近接武器として扱うことも出来る。

・エネルギーソード 『レヴァテイン』

エネルギーブーメランと共に実験的に装備されたエネルギーソー

ド。

展開時は1m60cmの西洋剣のようになる近接武装。ブーメランと違い実体剣としても使用できる。エネルギー形成時には実体剣の周囲にエネルギーが形成され、刃が赤くなる。

出力が高くエネルギー消費が激しいため、連続展開時間は1分。再起動まで30秒かかるため使いどころは非常に難しい。非使用時は腰部にマウントされていて呼び出す必要がない。

・左手、煙幕弾、ジャミング弾内臓複合盾『アイギウス』

絶対防御機能のついたISには珍しい大型の盾。盾内側に一回きりとはいえ煙幕弾が装填されていて、不意をつくことが出来る。

また空中待機型の小型ジャミング兵器を合計3機打ち出すことができ、ISのハイパーセンサーを狂わすことも可能。ただしジャミングが強力すぎるため範囲内にいると自身のハイパーセンサーも使えなくなるため注意が必要。

煙幕弾と同時に使うことによって相手から完全に身を隠すことができる。

設定（後書き）

前回の後書きで主人公のプロフを書くと言いましたが、まとめてやった方が作者としても読者としても理解しやすいと思い設定として上げました。

パッケージですがもう設定は決まっていますが登場毎に追加していきます

のでお待ちください。

本編は今日中に上げます。

1-1 (前書き)

連続投稿2話目！

1—1

IS学園、一年一組

「皆さん入学おめでとう。私は副担任の山田真耶です」

あつという間に入学式を迎えた私の前には、黒板の前で小柄で胸の大きいメガネの女性、山田先生が自己紹介をしている。

やまだまや・・・上から読んでも下から読んでもやまだまや。この人の名前を聞いた人は絶対この印象を受けるはず。私だけじゃないよね!?

第一印象がこれなんだけどどうしよう・・・でもやさしそうな先生かな?

「あ、あれ? え?」

こっちが反応しないことに戸惑ってるみたい・・・というよりみんな他のことに興味が有るといったほうが正しいと思う。

かく言う私もある無しに関わらず見ることになってしまう。

本来女性しか使えないIS、よってIS学園に通うのは必然的に女性になる。その中の異端。

受験時にISを偶然起動させ、世界で唯一ISを動かせる人になった男性。

全世界規模でお茶の間を騒がせた張本人。

名前は確か・・・織斑一夏・・・さん。

出席番号は名前順なのでオの次はカ。必然的に私の目の前に織斑さんの背中がある。

こういう時は自分の苗字を恨むしかない。

山田先生が必死に施設のことなどを説明しているけどやっぱり沈黙だ。なにか答えてあげたほうが良かったかな？

でも、恥ずかしいし・・・

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

あ、涙目になっちゃった。やっぱり返事くらいすればよかったかも・・・

ア行から始まるので自分の番はすぐだ。しかも織斑さんの後・・・うう、やりにくいよう

「では次は織斑君。お願いします」

あれ？織斑さんどうしたんだろう？
なにか考えてるのか俯いたまま返事がない。

「織斑君！織斑君！？」

「は、はい！？」

「あ、大声だしちゃってごめんなさい！でも・・・自己紹介、“あ”から始まって、今“お”なんだよね。自己紹介・・・してくれるかなあ？だめかなあ？」

うーん、山田先生は優しいというより私みたいに引っ込み思案なんでしょうか？それはそれで教師として問題があるような。

「えー・・・織斑一夏です、よろしくお願いします・・・」

うわ！皆の視線が痛い！

私に向いてるのじゃないって分かってるけど背中にヒシヒシと伝わってくるよ。

席替えてもらえないかなあ！？

簡単な自己紹介過ぎて皆が次の言葉を期待してるのがすごい分かる。

織斑さんもその空気を感じ取ったみたいで深呼吸をすると・・・

「・・・・・・・・以上です！」

ガタガタガタっ！という音と共にクラスの大半が椅子から転げ落ちた。

私はというとポカーンとしてしまったのだが・・・・でもみんなの反応も分からないこともない。なにか言うのかと思ったから当然といえは当然だよ。

と思っいたらいつの間に教室に入ってきたのか、黒いスーツ、タイトスカートの長身で鋭い吊り目の女性が立っていた。

その女性が拳を振り上げて・・・・周りを気にしている織斑さんの頭に振り下ろした。

風を切る音共に出席簿が振り下ろされ、気味のいい音と共に織斑さんがうずくまる。恐る恐る振り返った織斑さんが声を上げた。

「つてえ！！・・・つてげえ！関羽！？」

あ、また叩かれた・・・・痛そう・・・・いや、最早痛いを通り越してその出席簿の振り下ろす速度に感心してしまいました。

で、織斑さん。なぜそこで三国志の英雄の名前が出てくるんですよう？

「誰が三国志の英雄か、バカものが」

「織斑先生、会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「いえ、副担任としてこれくらいはしないと」

その女性は軽く山田先生と会話を交わすと黒板の前に立った。

ん、あれ？　そういえば織斑って、同じ苗字？

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。これから一年間で君達を使い物にするのが私の仕事だ。だから私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。理解出来ない者は出来るまで指導してやる。私の仕事は若干15歳から16歳までを鍛えることだ。だから逆らっても良いが、私の言う事だけは聞け、いいな」

そう言った瞬間教室が割れるような嬌声に包まれた。思わず耳を塞いでしまう。

「キャーーーーー！！　千冬様！　本物の千冬様よ！！」

「私、ずっとファンでした！！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に入学したんです！　北九州から！！」

「お姉さま！　オランダに移住して結婚してください！」

「私、お姉さまの為なら死ねます!!」

ああ!そうか、この人が!

織斑千冬さん。

モンド・グロッシン

第一回IS世界大会の総合優勝および格闘部門優勝者。その実力から『ブリュンヒルデ』と呼ばれる事実上最強のIS操縦者。

非公認だけどあの『白騎士事件』の当事者というのがもっぱらの噂だ。

確かにIS学園で教師をしているというのは聞いていたけどまさか担任がその本人だなんて・・・

「毎年、よくもまあこんな馬鹿者共が集まるものだ。私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか?」

織斑先生がそう呟くけど・・・多分どこも同じじゃないでしょうか?世界中でファンクラブがあるみたいですし。

「・・・で?挨拶も満足に出来んのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は・・・っ」

織斑先生の手によって織斑さんが机に叩きつけられた・・・
・分かりづらいから今から織斑さんは一夏さんと呼ぼう。

もちろん面と向かつては恥ずかしいから言えないけど。

「織斑先生と呼べ、馬鹿者」

「・・・はい、織斑先生」

苗字が同じでこれだけ親しいということは恐らく、いや十中八九実の姉弟なのだろう。周りもその関係に気づいたようでヒソヒソと声が聞こえる。

織斑先生が机を叩いただけでそれを沈めた。

「時間も無いことだし次の者、自己紹介を」

「は、はい！」

立ち上がると同時にちよつと足を打った・・・うう、皆には気づかれてないみたいだけど、痛い・・・

「か、カルラ・カストです。オーストラリアから来ました。若輩ながら代表候補をやらせてもらっています。これから1年間、よろしくお願いします」

「ほう、お前がオーストラリアの代表候補生か。確か、元は一般の女子学生ということだったが」

「あ、はい」

「またも周りがざわつくのを感じた。うう、今度は私への視線が痛い・・・」

「人から注目されるのは苦手なのに・・・ああ、なんか緊張してきた！」

「元が一般人であろうと私は容赦しないからそのつもりでいろ。いな」

「・・・はい・・・」

「返事はしっかり！」

「ひ・・・は、はい！」

「うむ、では次の者」

「うう、これでは注目されてるのも一緒ですけど・・・」

「・・・え？ 私以外にも代表候補生がいるんですか？ しかもイギリス？」

「ほっ、どうやら私だけが注目されるという自体は避けそうですね。」

「それにそもそもこのクラスには一夏さんがいるんですから私より目立つのは確実ですね。」

自己紹介が全員終わったら授業の前の小休憩。それから授業だ。

「さあ、いつまで騒いでいる！ SHRは終わりだ。諸君等にはこれからの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか？ いいなら返事をしろ、よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。以上だ」

鬼教官という言葉が頭に浮かんだのは私だけではないはずだ。
それでも周りのクラスメイトたちは阿鼻叫喚になっているけど・

•
こんなので一年間大丈夫かなあ・・・

1-1 (後書き)

というわけで本編第一話。一夏との会合でした。

前書きで書いている通り、原作1巻分までは出来ているので10話前後まで連続投稿します。

内容で言うところ鈴が出てきてゴーレム倒す辺りまでですね。

それ以降はまた2巻分が出来たら連続投稿、という形をとりたいと思います。よろしくお願いします。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしております。

1-2 (前書き)

連続投稿3話目！

この学校は珍しく入学初日から授業がある。織斑先生だったら全寮制なので気にしないでもいいって言われそう。

一時間目はほとんど入学時に貰った参考書に書いてあったことだったしあまり聞いてなくても・・・

とと、織斑先生がいるんだ。ばれたらさっきのツール・ハンマー（命名私）が私の頭にも振り下ろされかねない。集中しなくては！

「先生」

「はい、織斑君」

「ほとんど全然分かりません」

ほえ？

自分の正面から聞こえた声に思わず顔を上げてしまう。

それは山田先生も同じだったみたいで何を言っているか理解できないみたいでした。確かに男性はISに関係ないので私たち女性と違ってそもその基礎知識から違うのは分かるのですが、今やっているのは入学前に配られた必読の参考書に載っている基礎の内容のほ
ず。

一夏さんも貰っているはずなので分からないはずはないのですが・・・？

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「あの分厚いやつですか？」

「そうだ、必読と書いてあったろ」

「いや、あの・・・」

もしかして・・・

「電話帳と間違えて捨てました」

あ、やっぱり・・・私も最初は電話帳かと思ったもんなあ。面白かったからすぐ読んじやったけど。

うわ！出席簿で横頬を殴られた！バシーンっていったバシーンって！

「表紙に必読と書かれてあっただろうが馬鹿者！後で再発行してもらうから、一週間以内に覚えろ、いいな？」

「い、いや・・・一週間であの厚さはちょっと・・・」

「・・・やれと言っている」

「・・・・・・・・はい、やります」

鋭い眼光でにらまれて一夏さんが頷いた。

というよりそれ以外の返事は許さないという目だ。あれでも一回でも反抗したらおそろくあのツール・ハンマーが振り下ろされるのだろう。

あれは弟だからなのだろうか、それとも他の人にもあんな風にやるんだろうか。

もしあの人の前でへまをしたらああなっちゃうんだろうか・・・

あわわわわわわわ・・・

「カストさん？」

「・・・・・・・・」

「カストさん！」

気づくと山田先生に呼びかけられていた。

「ひ、ひゃい！」

「大丈夫？何か顔が青いみたいだけど」

「だ、大丈夫です！問題ありません！」

「そう？ならいいけど」

いけないいけない。また悪い癖が出てたみたい。気をつけないと。

———休み時間———

教室の外には一夏さん目当てに他のクラスからすごい数の人が押しかけている。まるで客寄せパンダだ。

お手洗いに行くため廊下に出るのも一苦労してしまう。

かく言う私もさっきまで自分の席から離れてわざわざ遠巻きに見ているんだからその中の一人に変わりは無いんだけど・・・

一夏さんがパンダの気ぐるみを着て机に座っているのを想像してしまった・・・ふふ、なんだか可愛いかも。

授業開始ギリギリに教室に戻ると一夏さんと金髪のクラスメイト、確かイギリス代表候補生の（自己紹介のときそこだけすごい強調してた）セシリア・オルコットさん、だったよね。

その二人が何か言い合いをしていた。

言い合いというかオルコットさんが何か一方的に怒ってるように見えたけど。

その時休み時間を終えるチャイムが鳴り響いた。

「くう！話の続きはまた改めて！お逃げにならないように！」

「逃げるってなんでそんな必要があるんだよ」

なんの話をしていたか気になるけど・・・でも一夏さんに直接聞くのも恥ずかしいし・・・

「はい、皆さん。授業を始めますから席についてください」

そんなことを考えていると山田先生が入ってきた。そういえば一夏さんってさっきの休み時間にも篠ノ之さんにも話しかけられてたなあ。

っと、織斑先生が入ってきた。集中しないと！

今回の授業は織斑先生が担当みたいでそのまま教壇の上に上がる。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

そこまで言って織斑先生が思い出したように切り出した。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス対抗戦と代表者？

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会などへの出席：まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが競争は向上心を生む。一度決まると何か大事が無い限り一年間変更はないからそのつもりで」

なるほど、つまり委員長のような存在というわけですか。これは私が出る幕ではなさそうですね。というよりも・・・

「はい！織斑くんを推薦します！」

「あ、私もそれがいいと思います！」

「私も織斑くんで！」

「お、俺！？」

必然的にこうなるのが分かってるのでそこまで焦る必要はないというかなんというか・・・

「他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ちょっと待った！俺はそんなのやらな・・・」

「自薦他薦問わないといった。他薦されたものに拒否権などない選ばれた以上は覚悟しろ」

有無を言わせずとは正にこのところだろう。

まあでも流石にこれで一夏さんも諦め・・・

「だ、だったら俺なんかより相応しい奴がいるだろ・・・えっと・・・カストさんとか」

「え・・・」

一瞬思考が停止した。

え？一夏さんは今なんていいました？すみません思考が全く追いつかないので誰か説明をお願いします。

「ふむ、では織斑とカストで投票ということでもいいな？」

はい！織斑先生簡潔かつ明快な答えをありがとうございます！

「あの・・・拒否権って・・・」

「当然なしだ」

ですよねー。織斑先生にまったく表情を崩さずに言い切られました。

こ、これが切り捨て御免というやつなのですか。日本人はもっと遠まわしに物事を言う人たちだと聞いていたのですが。織斑先生に常識は通用しないみたいです。

「あ・・・なんかごめん・・・そこまで嫌だったなんて」

「ぐすっ・・・いいんです、諦めました・・・」

涙が出そうになってしまいますが相手が推薦されている以上推薦し返すというささやかな仕返しさえできない。
それに多分選ばれるのは一夏さんでしょう。

「よし、ではこの二人で・・・」

「納得いきませんわ!」

バン!という音と共に聞いた声が教室に響いた。振り返るとオルコットさんが怒りに肩を震わせて立ち上がっている。

「そのような選出は認められません! 男がクラス代表なんていい恥さらしですわ! このセシリア・オルコットにそのような屈辱を

一年間味わえと仰るのですか!？」

屈辱って・・・そこまで言うほどのものでもないと思うのは私だけでしょうか？

いいえ、推薦されている以上他の人は一夏さんでいいと思っています。はずですのでオルコットさんだけだと思います。

ちなみに私も一夏さんでいいと思っています。

「第一！文化としても後進的な国で暮らさないといけないこと事態、私には耐え難い苦痛で・・・っ!！」

「イギリスだって大したお国自慢無いだろう。世界一不味い料理一位、何年覇者だよ」

一夏さんが言い返した言葉にクラスの何人かが軽く頷いている。
まあ・・・私も前にイギリスに行ったことがありますがあれは確かに・・・

それからオルコットさん。日本はイギリスと比べても経済国として有名ですし、何と言ってもISを作った国ですから文化後進国は間違っていると思います。

「な！貴方私の祖国を侮辱しますの!？」

さらに言えば先に日本を侮辱したのはオルコットさんなんですけどね。

「それと！カストさん！」

「ひゃい！」

な、何なに！？いきなり話を振らないでください！

「貴方も代表候補生ということですけど、クラスの代表者は一番強い人になるべきだと思います？」

「は、はあ・・・そうですね」

まあ、それは確かにそうですね。

「それに加えて！元々わが国の支配下にあった国の人より私のほうが下と思われること事態がこれ以上ない屈辱ですわ！」

ブツン・・・

自分の中で何かが切れる音がした。

「で？結局何が言いたいんですか？」

「決闘ですわ！この中で誰が一番強いのか、その身に分かせて差し上げます！」

「流石イギリス。気に入らないことがあれば争いごとで決めるのは昔から変わらないんですね」

「な、なんですって！」

「それに所構わず怒鳴り散らすのがイギリス淑女の嗜みなんですか？お国柄を疑う淑女のあり方ですね。あなたの言う元々支配国の私の国のほうがまだマシですよ？」

オルコットさんの顔が真っ赤になっている。いい気味だ。

故郷を侮辱するような人に容赦する理由はどこにもありません。

「いい加減にせんか馬鹿どもが！」

ダァン！

「ひい！」

教室中に響き渡るほどの勢いで織斑先生が教団を叩いた。

「二人とも口は十分回るようだが、どちらも代表候補ならばISで

決着をつけてみる」

「わ、分かりました」

「り、了解ですわ」

その有無を言わせない気迫にオルコットさん共々頷くしかありません。

「それでは一週間後の月曜日、第3アリーナで模擬線行う。カスト、オルコットが先に戦い、勝ったほうと織斑と戦い、そこで勝ったものがクラス代表だ。三人はそれぞれ準備をしておくように。織斑も、それでいいな？」

「え？それってどっちかは連戦するってこと・・・ですか？」

織斑先生の言葉に一夏さんが慌てて口調を改める。どうやらまた叩かれるといったことは防げたみたいです。

「仮にも二人とも代表候補生だ。連戦ハンデ無しで丁度いいくらいだろう？」

「分かりましたわ」

「私もそれで構いません」

「よし、ではこの話は終わりだ。授業を始めるぞ」

そう言って織斑先生が締めくくった。とりあえず勝負は来週の月曜日。週末に調整が出来ればいいんですけど。

私は無意識の内に首から下げられてた指輪を服の上から弄っていた。

1-2 (後書き)

『デザート・ホーク』の待機状態は金の指輪。カルラは鎖に通して首に掛けて、胸元にしまっています。

というわけで連投3回目。カルラの静かなる激昂を描きました。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしております。

1-3 (前書き)

連続投稿4話目！

1—3

「えっと、1024・・・1024・・・あ、ここだ」

夕食が終了し、私は今割り当てれた部屋を見つけて扉に手をかけた。

「あ、あれ？」

鍵がかかっている。どうやら相室の人はまだ戻ってきてないみたいだ。食堂に最後までいたのは私だったんだけど・・・

貰っている鍵を使って中に入る。電気をつけて中を確認するとまだ相手の荷物さえない・・・

荷物は入学前に運び込まれてるはずなんだけど？

「もしかして・・・」

寮の部屋割り名簿を確認する。思ったとおり・・・ここではあまり思い通りにならないで欲しかったんだけど・・・相室はいないという決定的な事実がそこには記されていた。

「そ、そんなぁ・・・」

せっかく友達を作れるチャンスだと思ったのに……
相室がないなら一夏さんが一番いいんじゃないの！

いや、まあオルコットさんと一緒よりは全然いいんだけどね。

ベッドの上でそうしてゴロゴロ悶絶していたが今更決まったことを嘆いても仕方ない！

こうなったらクラスで友達を！

バキィ！

「ひい！ごめんなさい！」

思わず謝ってしまった……こういう時は同室がいなくて良かったかも……

音源は隣りの1025かららしい。なにかの破壊音と喧騒が聞こえてくる。

初日から喧嘩でもしてるんだらうか？

興味本位で扉を開けて外を確認すると既に人だかりが出来ていた。

人だかりの中心は隣の部屋の入り口。一夏さんがいた。

どうやら隣の部屋は一夏さんの部屋みたいだ。でも中に誰かいるみたいだ。女の子と同室になってしまったのだろうか？

みんな既に部屋着やパジャマなどラフな格好でいる。私にはあそこまで恥ずかしげなく男性の前に出ることは出来ない・・・と思う。

ふっと、入り口を開けている私と目が合った。

え？え？何でこっちに走ってくるの！？

必死の表情で迫ってくるので思わずドアを閉めようとして・・・
閉まりきる前に取っ手を掴まれた！

「ひい！」

「ごめん！匿ってくれ！」

「え？ええ！？」

「お願いします。このままじゃいろいろまずいので頼む！いや、頼みます！」

「う、うん。構わないけど」

「助かった！ありがとう！」

必死の懇願に思わずうんと答えていた。一夏さんを中心に立て扉

の鍵をかける。

「えっと・・・カストさん、だったよね？」

「え、はい。そうですけど」

「良かった。無理言っ入れてもらって名前まで間違ってたらどうしようかと思ったよ」

息を整えている一夏さんがそう言う。

「そういえば・・・思わず入れちゃったけど若い男女が密室で二人つきりって言うのは非常にまずい気がしてきた・・・」

「と、ととと・・・とりあえず織斑さん、何か飲みますか？」

「へ？ああ、いいよ。ほとぼりが冷めたらすぐに出て行くから・・・」

「いえ！招いた客人をもてなしもせず返したとあっては両親の教えに反します！ぜひ！」

「そ、そうなのか？じゃあお願いしようかな」

自分の気持ちを落ち着けるために半ば強引に進めてしまった・・・
両親の教えというのは本当だけどこっちのほうが怒られそうな・・・

とりあえず椅子を進めてから荷解きもしていないダンボールの中からコップを二人分取り出して他のダンボールから飲み物を取り出す。

やっぱり最初に飲んでもらうなら『ヌーディー』かな？あれなら誰でも好きになれる味だと思う。

「どうぞ」

「ああ、ありがとう」

「いいえ」

座ってる一夏さんにコップを渡して反応を待つ。実は他の国の人に物を勧めるのは初めてだったりするわけで・・・

「お・・・」

「お、美味しいくなかったですか？」

「いや、逆だよ！これ美味しいなあ！」

「そうですか？良かったあ」

「うん、不思議な触感がするけど。これフルーツ？」

「はい、これは柑橘系のフルーツを使ったものです。国では『ヌー

ディー』と言って結構有名なんですよ？他の果物のも飲んでみますか？」

「いいのか!？」

「はい、むしろ飲んでください」

かれこれ一時間は『ヌーディー』の話で盛り上がっていただろうか。と言ってもほとんど私が故郷の話を交えながら勝手に話していただけのような気がしますけど・・・

気がつくとほぼ全てのボトルの蓋を開けて試飲させてしまっていました。

「あ・・・す、すみません！」

「へ?どうしたの?」

「こ、こんな無理やりいっぱい。織斑さんに迷惑でしたよね」

「ああ、そんなことか。むしろご馳走になっちゃって悪いって思ってたくらいなんだ」

「そ、そうですか?ならいいんですけど・・・」

「迷惑なら迷惑って俺はちゃんと言うからさ。。気にしなくてもいいよ」

一夏さんはそう言って笑ってくれた。いい人なのかな・・・織斑先生とは大分違うタイプみたい。

「あ、そういえばさあ」

「はい？」

思い出したように織斑さんが尋ねてきた。

「カストさんもえっと・・・代表候補生なんだよな？」

「え、ええ。そうですよ。それがなにか？」

「いや、あのセシリアって奴と大分感じが違うというか・・・エリートって感じじゃないなあって」

「ああ、そう言うことですか。確かにほとんどがエリートと言える人たちでしょうね。むしろ私みたいな人のほうが特例です」

「カストさんもセシリアみたいな貴族とかどっかの社長の令嬢とか？」

「いえ、生まれは一般家庭でどこでもあるような普通の学校に通ってましたよ。私の場合は両親がIS開発に携わってるんですが、その関係で。なのでこれと言って特異なものがあるわけではありません。そんな私に専用機まで用意してくれるんですから両親と国の人たちには本当に感謝してます」

「ふん」

この顔・・・専用機って分かってませんね。

「織斑さん、教科書の6ページを読んでおくことをお勧めします」

「へ？なんでさ？」

「専用機って言葉の意味、わからなかったでしょう？」

「あ・・・バレた？」

「当然です」

普通なら専用機持ちはISを使うものにとっての憧れ。それをあんな風に流すんですからそれはバレて当然でしょう。

そこで話が途切れたので外の様子を見るために鍵を開けて廊下に顔を出す。どうやら皆さん部屋に戻ったようだ。

「織斑さん、もう大丈夫みたいですよ」

「そっか、本当ありがとうな。カストさん」

「いえ、織斑さんは唯一ISを使える男性ですし・・・皆さんの興

味を引くのも仕方ないことかと」

「あゝ、そのさ、織斑さんってやめてもらえないかなあ？」

「へ？」

「ほら、千冬姉がいるだろ？そのせいで苗字で呼ばれるとなんかむず痒くってさあ」

確かにそうかもしれない。けど・・・

「でもいきなり名前で呼ぶのも・・・」

「んー、俺は構わないんだけど・・・お！じゃあさ、友達なら名前で呼んでも大丈夫だよな」

「はい？」

そんなさもいいアイディアを思いついたように言われても！

「あれ？迷惑だったか？それならいいんだけど・・・」

「いえいえいえ！そんな私なんか・・・むしろもったいないって思うくらいで！」

「じゃあ俺とカルラさんは今から友達ってことで、おっけー？」

「は、はい。おっけー・・・です」

そう言って一夏さんが手を差し伸べてきた。

「よろしくお願いします、おり・・・一夏さん」

「うん、よろしく。カルラ！」

「カル・・・！」

ま、まさかいきなり名前を呼び捨てにしてくるなんて！せめてそこは『さん』づけとかじゃないんですか・・・

「あれ？カルラ、顔が真っ赤だけど大丈夫か？」

「だ、大丈夫れす！また人が来る前に早く戻ったほうが！」

「あ、ああ。じゃあカルラ。明日からよろしくな」

そう言って一夏さんは部屋に戻って行った。

日本の男性というのはあそこまで大胆なものなのでしょうか？一夏さんが特別なのでしょうか？

と、とりあえず疲れました・・・今日はもう寝ましょう

『よくもまあオメオメと戻ってこれたものだな!』

『ま、まだ怒ってたのか!!!』

隣の部屋から叫びが聞こえますが・・・

幻聴です。幻聴なんです。これは余程疲れているのでしょう。早くシャワーを浴びて寝なくては明日に支障がでますね。

『成敗してくれる!』

『た、助けてくれー!!!!!!!』

こういう時は日本語でなんて言うんでしたっけ? ご愁傷様です、で合っていましたっけ?

1-3 (後書き)

カルラの部屋には後々誰か入ります。

はい、連投4回目。代表候補戦は話数的にちょうど今週末くらいになりそうです。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしております。
それではまた次回 ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9849x/>

IS 《インフィニット・ストラトス》ーオーストラリアの代表候補！？

2011年10月31日16時08分発行